

バイクで走った東欧・旧ソ連 — 4半世紀の時を隔てて

金子芳樹

コロナ禍が始まる半年前の 2019 年夏、東欧とロシア、ウクライナを中心にヨーロッパ大陸の東側をバイクで回ってきました。ドイツのフランクフルトで大型バイクを調達し、2ヵ月かけてこれら旧社会主義の国々を走る 1万1千 km の長旅でした。日本からの移動や現地での準備期間を含めて約3ヵ月の時間がとれたのは、半年間の「長期研究休暇」（サバティカル：sabbatical）を利用したからです。



国を問わず大学には、教員が通常の授業担当の業務から半年または1年ほど離れ、自らが専門とする研究や教育上の蓄積に打ち込むことができるようサバティカルが制度として設けられています。この期間に海外での研修や調査・視察に出かけたり、論文や著書のためのリサーチや執筆作業をしたりするのです。一定年数務めると申請できるサバティカルですが、私にとっては12年ぶりの貴重な機会でした。

バイクで海外を走るのは、専門とする東南アジア研究の現地調査で30数年前に試したのがきっかけでした。その機動性、人々との「近さ」、さらに五感で吸収する現場感覚、陸路をたどることで見えてくる土地ごとの違いや連続性などに魅せられ、アジア以外でもバイクを使うようになったのです。その道のりはこれまでに4大陸、約50カ国に及びました。

じつは、今回とほぼぴったり同じルートを27年前に走っています（ルートマップ参照）。前は冷戦終結から間もない2002年で、この地域にはまだ社会主義の臭いが強く残り、人々は変化と混乱のまっただ中にいました。それから4半世紀を隔てて、各地の風景や人々の生活がどのように変わったのか、好奇心にまかせて視察の旅をスタートさせたのです。

半年後に襲ってくるコロナ禍など予想さえないなかったこの年6～7月のヨーロッパは、夏の日射しが照りつけ、人々が街に溢れ出し、各地でイベントが目白押しで、どこも活気に満ちていました。前回の旅で見たのは、社会主義からは抜け出したものの混沌と貧困にあえぎ、どんよりと重苦しい空気が漂う東



欧・旧ソ連でしたが、その姿は様変わりしました。特に、ヨーロッパの東西で際立っていた経済発展の格差がぐっと縮まったというのが今回の旅を通しての印象です。とはいえ、細かくみれば国ごとに変化の度合いは異なり、変わった点と変わらない点が入り交じり、さらに各国の個性がその上に重なってじつに複雑な模様を描いています。もとより、文化や社会の伝統は時代と越えて受け継がれており、ヨーロッパでも東側には東側の、やはり西側とは違う彩りの陰影を発していました。

2ヵ月間でたまった旅の記憶や伝えたいことは山ほどあり、容易には語り尽くせませんが、その一端を授業で紹介する機会がありました。2021年度春学期の外国語学部総合講座「変化するという事」というオムニバス科目の中で、2回にわたり「東欧・旧ソ連の変化—冷戦直後の旧社会主義圏とその27年後」をテーマにオンデマンドの講義をしました。その授業で使った写真を150枚ほど選んで、以下のサイトで公開していますので、興味のある方はのぞいてみてください。この時回った16カ国の写真を国別に掲載してあります。⇒写真集<<https://photos.app.goo.gl/WtFuKKiFt7VgViQn7>> その一部をこのページの下にも載せておきます。

また、今回に限らず、旅をしたらそのレポートを雑誌への投稿やブログなどを通して、できるだけ公開するようにしています。今回の旅については、現在（2022年1月20日）までのところ獨協大学の学報に以下のエッセイを掲載しました。

「18回の国境越え—バイクで走った東欧・旧ソ連」『獨協大学学報』第37号（2020年号）

また、これまでのバイクの旅の一部（東南アジア大陸部、ブータン、韓国一周、アラビア半島など）をゼミのブログでも公開しています。⇒ゼミブログ <http://kanekoseminar.dreamlog.jp/archives/cat_102851.html>

ヨーロッパから帰国してまもなく世界中がコロナ禍に見舞われ、海外への渡航ができなくなってしまいました。あれから2年半、あの旅で通り抜けたほとんどの国が「鎖国」を強いられ、自由な国境越えなど考えられない状態が続いてきました。あの時のような旅がまたできる日が一刻も早く来るように・・・そう願うばかりです。



チェコ（プラハ）



ポーランドの平原



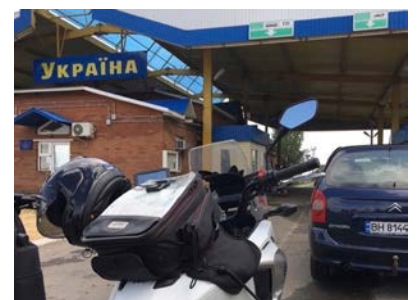
トルコ（イスタンブール郊外）



ロシア（モスクワ赤の広場）



スロバキア・ハンガリー国境付近



ウクライナ・ロシア国境



ブルガリア（ソフィア）



ルーマニア（トランシルバニア山脈）



エストニア（タリン）